

組合長が考える教育文化活動

～未来永劫「きくちのまんま」で百年先の人づくり

熊本県 J A 菊池 三角 修

I. はじめに

J A の使命は何かと問われたとき、わたしは即座に J A 綱領と答える。

「一、地域の農業を振興し、わが国の食と緑と水を守ろう。

一、環境、文化、福祉への貢献を通じて安心して暮らせる豊かな地域社会を築こう。」

の条文を示す。

平成 20 年 6 月、代表理事副組合長に就任したとき、「いかにして農業を振興しながら組合員の暮らしを守るか。組合を健全に運営するにはどうしたらよいか」を考えた。

全国的に人口が減少するなか、J A 菊池管内は 30 年、微増ないし横ばいと推測されている。わたしはそこに目をつけた。どうしたら人口の増加地帯を J A 菊池の事業に活かせるか。それぞれの部署から出てもらい、プロジェクトチームを作り総合企画部を立ち上げわたしの直轄でやろうとした。ところが職員同

士がおたがいを知らない。プライベートなことには触れない。隣の席の人がどのような仕事をしているかもわからない。これでは総合企画部などともない。タテ割りの弊害があったのだ。

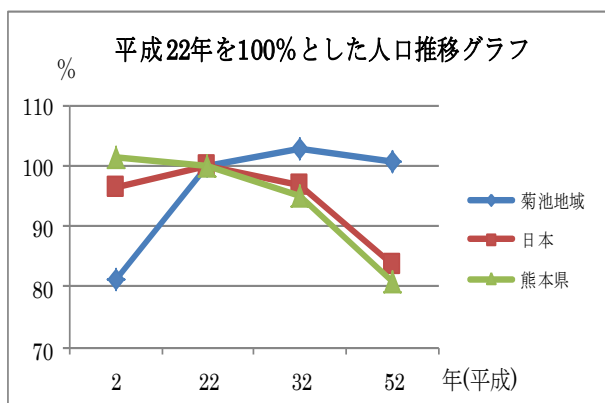
ひとつの物事を共有できる“風とおしのよい職場”をつくりたいと思った。まずは、それぞれの課、係、支所でコミュニケーションが図られることがいちばんだと考え、「小集団活動」という手法を取り入れた。これがのちわたしの教育文化活動への始発点となる。J A 菊池の歩みを振り返りながら J A 自己改革の現状とビジョンを述べたい。

II. 使命を遂行するために

J A 菊池は教育に熱心であった。平成 3 年から平成 10 年まで職員教育専門の常勤講師として熊本県中央会 O B の川崎盤通氏(平成 22 年度農協人文化賞受賞)を招へいし、その後、平成 21 年まで非常勤講師をしていただいた。独自の内部研修をしながら平成 8 年、統一理念、経営方針、職員行動基準を職員とともに作成した。

使命を遂行するためには、組合員の力がもっとも大切だとわかっているが多人数のため、簡単には動かない。

まず、組合員といちばん接する職員に十分に理解してもらうこととした。前述したよう



に「小集団活動」で職員同士のコミュニケーションをとることで情報の共有化を図り、“自分で考え、行動する”という環境づくりができるようにしたいと考えた。小集団をつくり、テーマは自由とした。中間報告と最終報告のレポートを出してもらったこととした。

ひとつ紹介すると「机の上と下の整理」、グループ全員で月に1回整理ができていない順番に投票をしてワーストになった人にはきれいにしてもらい、年末には、机の上と下が整理されるというもの。とてもほほえましく思えた。

年間優秀賞を選び、役職員全体研修時に発表の場を設けた。5年目を迎え、職場の活性が感じられるようになってきた。新たな展開として地域密着型のテーマを考えて欲しいと伝えている。

Ⅲ. JA菊池のあゆみと教育文化活動の現状

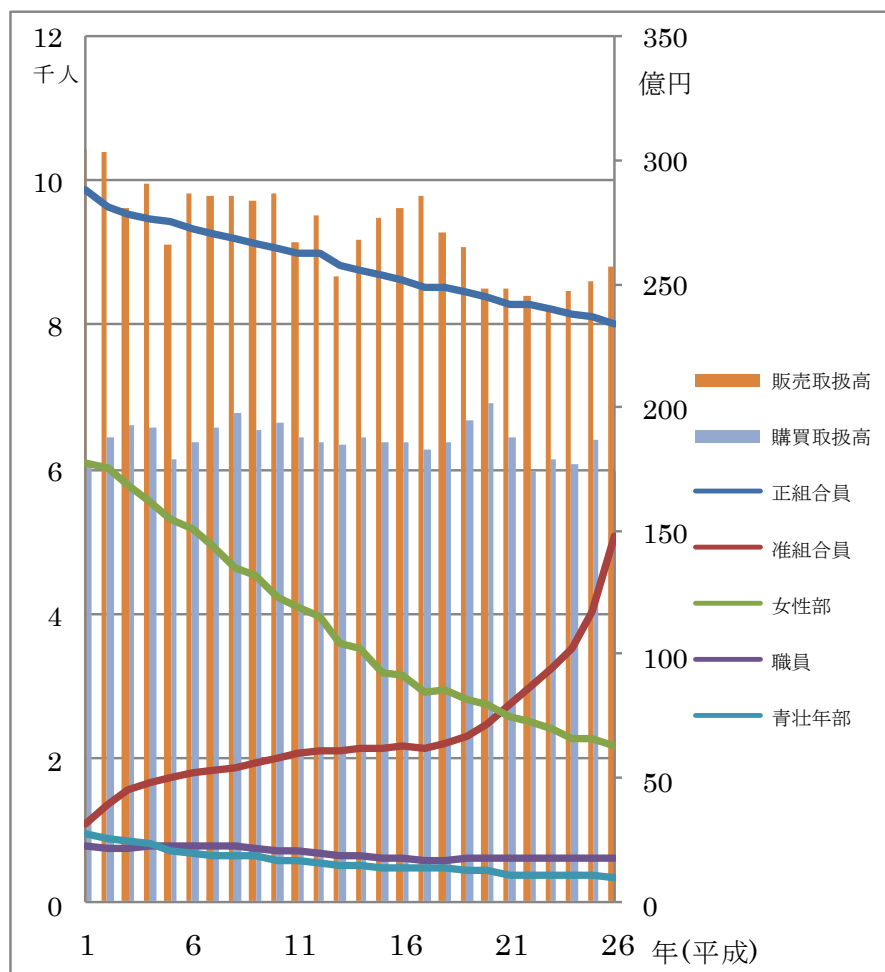
青年部、女性部と活発に活動しており全国レベルと考えている。また、生産部会も30以上あり、販売高、購買高が示すように結集率も高い。しかし正組合員の高齢化にともない管内の農家人口は減少しているのが実態である。典型的な経済型JAであることから営農指導員、生活指導員に期待されることが大きく、人数的には配置しているが、資質の向上が望まれている。

中央支所には総代、青年部、女性部より選出された「支所運営委員会」が発足当初から存在するものの教育文化活動については手薄で、今後その委員会を活性することがもっとも大切と考えている。

職員の意識向上については毎年3つの目標を掲げている。今年は①自己改革への挑戦、②地域とともに次世代へつなぐJA菊池づくり、③めざそう自律創造型職員としている。また、去年は『創』今年『挑』とわかりやすく漢字一文字の表現とした。それを各事業部署に額縁に入れて掲げてもらうことが、ひとつのガバナンスとわたしは考えている。

Ⅳ. 教育文化の必要性と今後の取り組み方針

第27回全国大会で「農業者の所得増大」「農業生産の拡大」「地域の活性化」と大きく3



点が自己改革の目標となった。JA管内で農業生産の拡大が図られればおのずと農業者の所得も増大し、それが地域の活性化につながるものとする。その礎になっているのが教育であり文化である。

職員には「自律創造型職員」になりなさいと言っている。わたしたち役員は9年もすれば役員を辞めていく、職員は、30歳の人はあと30年、このJA菊池で報酬を得、結婚し子どもを育て教育を受けさせて生活していかなければならない。そのためにはJA菊池が存続しなければならない。それには先を読む創造型職員になることだ。

しかし一方では進まない阻害する要因があることを見逃すわけにはいかない。大局的には戦後、産業組合の時代は食糧増産が国の命題であった。まずはひもじい思いを国民にさせないこと。そのためには共同作業をやり、肥料、農薬を集め、各集落ごとに生産組合をつくり、1俵でも多くの米を供出する競争をしたりして、地域の団結力があつた。また、おたがい助け合う相互扶助の精神もあつた。ところが、高度経済成長時代をすぎ、バブルに浮かれ、地域から個人へと世の中が変化するうち、経済が優先されるようになった。商品も当然のようにいたるところにあり、農業協同組合から調達しなければ手に入らないということもなくなった結果、農協が存在する価値も少なくなった。そこには商品が安く手に入れば商社から購入したほうがよいと考える若い農業後継者も少なくなく、株式会社との違いも理解しようと思わず、協同組合の理念が薄らいできているのが現状である。

一方JAとしても20～30年前より合併が進んできた。組織そのものは大きくなり経営

状況は悪くないものの、合併のメリットを数字的に追いかけるだけで、うしろを振り返ったら組合員がついてきていないような状況となった。急にあわてて地域密着型だ、支所重点主義だと言っているありさまである。

V. 教育文化活動の位置づけと取り組みの方向

綱領の「環境、文化、福祉への貢献を通じて、安心して暮らせる豊かな地域社会を築こう」は、くらしの活動を表現したものである。くらしの活動は教育広報活動と生活文化活動から成り立っており、その下に学習、広報、食農教育、福祉、健康管理等、多くの部門が存在する。それが何ゆえ存在するのか、それを何ゆえ行なわなければならないのか。それらの礎として教育文化活動があり、岩盤を強く厚みを増すことがもっとも大切である。子どもを世の中に出すのに20年かかる。多くの教育費も必要とする。JAの組織育成にも費用が多くかかることは当然で、未来への資金として支出している。青年部には500万円、女性部には1000万円以上の助成を行っている。

以下は主な取り組み内容である。

1. 職員

1) さわやか窓口コンテスト…平成12年より「職員一人ひとりがJA菊池の看板を背負っていることを肝に命じ、明るく爽やかな窓口づくりを心掛ける」ことを目的として年2回巡回して清掃ぐあい、身だしなみ等を審査するもので、全体のレベルアップにかなり貢献している。

2) 昇進提案…4等級から5等級へ、6等級から7等級へ昇格するときには、事業改革等について提案書を提出してもらおう。使えそう

なレポートは企画会議でとり上げて、フィードバックして活かしている。

3) 階層別研修…小集団活動の理論学習として全職員参加としている。これにより「人が育つ職場づくり」が少しずつではあるが目に見えてきている。先月はJAMP研修講師の河合昭彦先生より受講した。

4) 未来塾

5) 新入職員農家宿泊実習

2. 青年部

1) 部会青年部…花卉研究会、ライスクラブ、肉牛青年部、西瓜青年部等が結成され作物や家畜の専門学習会が活発に行なわれている。

2) 畜産経営塾…未来塾により提案されたものであり、講師は先進農家、税理士、JA職員等多彩である。この塾でわが家の経営を分析してもらい今後の方向性を考えてもらう。

3) チャレンジコンペティション…全国大会で何度もグランプリをとった盟友の主張、組織活動発表が最近のパフォーマンス的な発表になっているとの青年部内の意見により企画されたものである。青年部はわが家の経営、地域の産業を担うのがもっとも重要ではないかと、今年初めて実施された。最優秀賞にはチャレンジ資金としてJA菊池より50万円の賞金を提供した。

3. 女性部

1) 農産物市場「きくちのまんま」店…女性部員でないと出荷できない決まりになっており、女性部活動への協力、食材、購買等の農協事業、『家の光』の購読等協力をお願いしている。女性部員の減少歯止めに寄与しており、正組合員への加入、女性部の活性化、なにより女性が自立することが大きな効果ととらえている。

2) 助け合いの会…福祉事業は助け合いの会が原点となっており、今でもミニデイサービス等が行われている。デイセンター、有料老人ホーム、葬祭場、法事会館等すべて女性部と常勤役員との対話集会で出された意見であり、それが実現したものである。

3) サマーレディーススクール&家の光大会…著名人を招いて講演を聞くものであるが、参加者は1,000円のチケットを買って参加するものであり、女性部が企画運営し、自らが参加するというすばらしいイベントとなっている。会員・地域女性は、毎年楽しみにしている。

4) ふれあいの旅…農産物市場「きくちのまんま」への出荷代金で参加する人も多い。平成12年のオーストラリアは飛行機をチャーターしての旅であり大きな話題となった。

5) フレッシュミズ…平成10年に発足して全国女性協フレッシュミズ作文コンクールで最優秀賞を獲得したりして活発な活動をしている。会員87名。

4. 次世代へつなぐ食農教育

1) まんまキッズスクール…8年目を迎える。小学2~6年生を80名募集し、田植え、稲刈り、乳搾り、乗馬、ダイコンの播種から収穫、販売まで。またサッカーJ2、ロアッソ熊本のホームグラウンドのピッチを歩いたり、選手とハイタッチしている。

2) 景色の見える食卓づくり推進シンポジウム…青年部、女性部、教育委員会、先生、保護者、児童と多くの人たちを巻き込んだ手づくりのシンポジウムである。すでに6回開催し、全国で熱心に弁当持参を呼びかけられている小学校の先生を迎えたりして国内食糧のすばらしさ、農業の多面性、弁当作りによる

親子、児童同士のコミュニケーションがはかれることを目的としたシンポである。全国でも特筆すべきものと思う。

3) 花育…私事ではあるが、カスミソウ採花、アレンジをつうじて小学生との交流も 24 年となった。

VI. 活動取り組み具体策

3 年ごとの農業振興計画を作るときは必ず組合員にアンケートをとり、どのようなニーズがあるのか分析して、組合員の満足度向上に努めている。(文末図参照) 教育文化活動の面から具体的な方策を述べる。

1) 『家の光』記事活用運動

J A 運動をすすめるうえで、どうしても組合理念を理解してもらわないと活動がにぶってくる。原点回帰ということで時間はかかるが、今一度、『家の光』等の教育資材を利用した『家の光』購読運動から一歩踏み込んだ『家の光』記事活用運動、通称「家活」により協同組合の理念を学習する必要がある。

委員会は常勤役員をトップとして、支所では担当理事を頂点として「くらしの活動推進委員会」をつくり、その実行委員として生活課長、生活指導員を頂点としたワーキンググループをつくり二段構えでおしすすめたい。

2) 准組合員のつどい

一般消費者、准組合員との接点がある農産物市場「きくちのまんま」などで、家庭菜園の作り方、よりよい野菜の選び方、共済の考え方・選び方、金融情勢等の講座をつうじたつどいを行う。J A の理解者、サポーター・ファンになっていただくことが農協改革の答えへとつながると考える。J A を知ってもらうことから始めたい。

3) トップ広報

平成 26 年神戸で行われたトップフォーラムの広報分科会のパネラーとして、「600 余の J A の組合長がホームページに月に 1 回ずつでも書き込みをすれば大きな世論の形成につながる」と発言した。内向きではなく外向きにアピールすることが大切である。わたしも 1 月より掲載をはじめた。

4) 職員教育

J A 菊池の統一理念である「未来永劫きくちのまんま」、また、経営方針である「誠心誠意」、それらをもとに基本構想を作成し、3 ヶ年の中期的な第 9 次農業振興計画となっている。単年度の事業計画を遂行するにあたり、組合員の協力がなければならないが、役員の方針を受けて率先してがんばってくれる職員の存在がいちばんである。

5) 人事の複線化

6) 人事育成基本方針

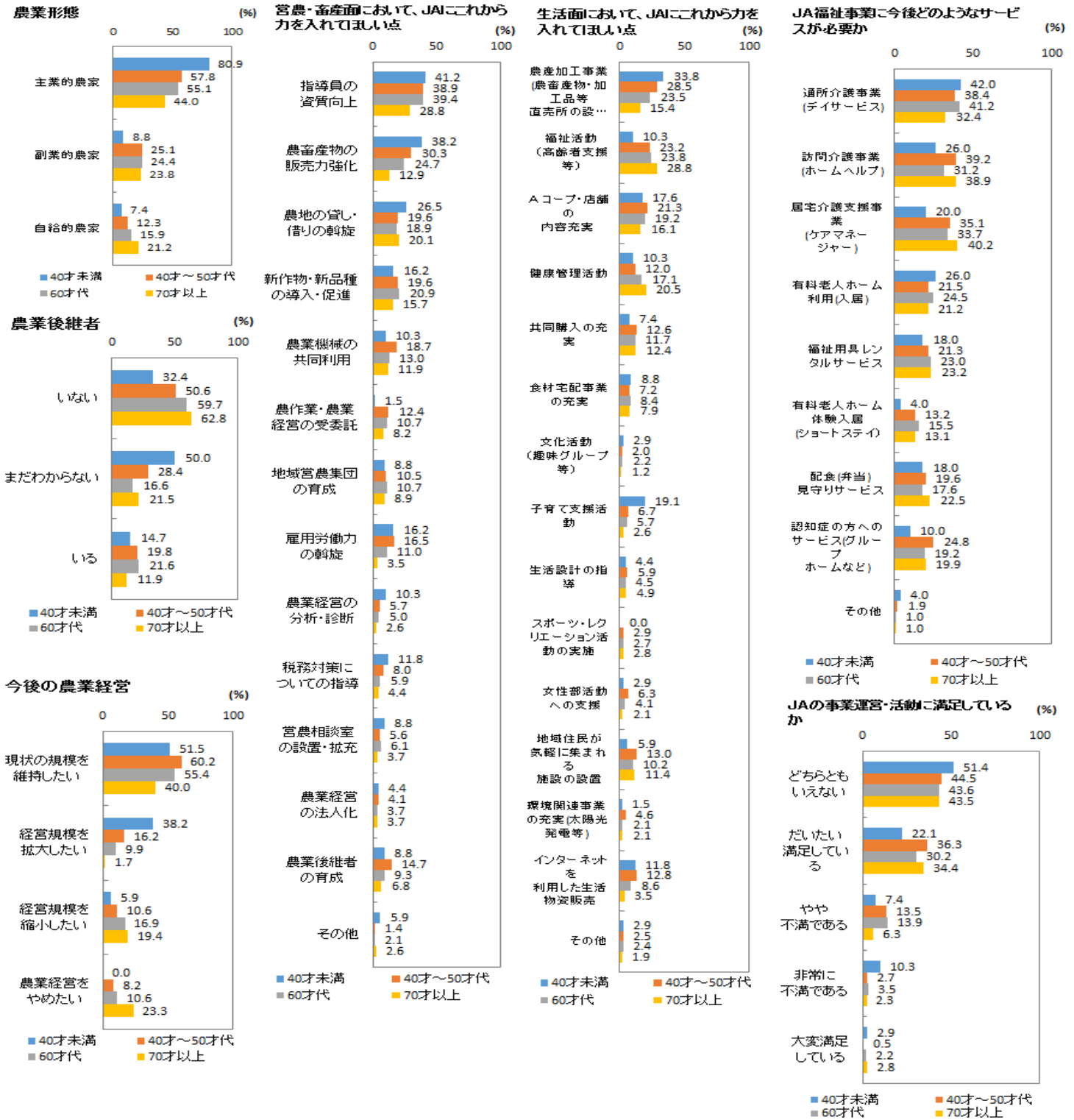
VII むすび

中国のことわざに「一年先を楽しむなら、花の種をまきなさい。十年先を楽しむなら、木を植えなさい。百年先に、幸せを求めるなら、人を育てなさい。」とある。

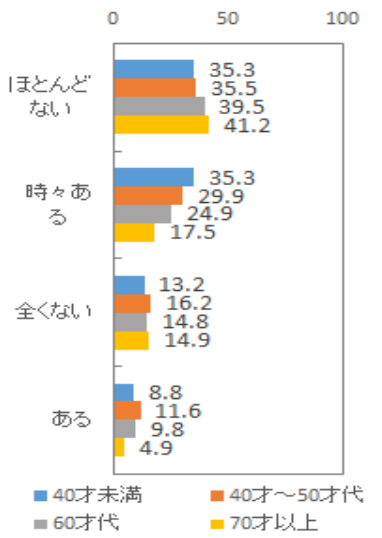
わたしは組合を預かる者として人が育つ職場環境、地域環境をつくるのが責務であると考え。J A 菊池の統一理念である。未来永劫「きくちのまんま」であり続けるよう、百年先をみて人づくりをしている。

【組合員意向調査の結果】

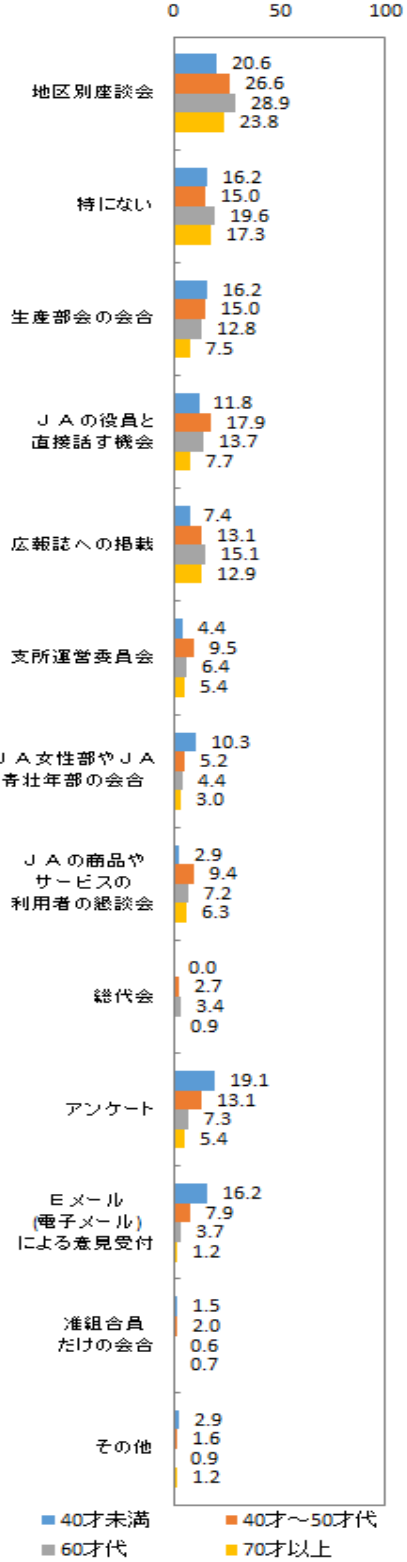
このアンケートは平成 26 年度に無作為に抽出した正組合員 2,460 名（30.3%）の方々にお願いし、回収率 93.5% の高い回収率を得ることができた。



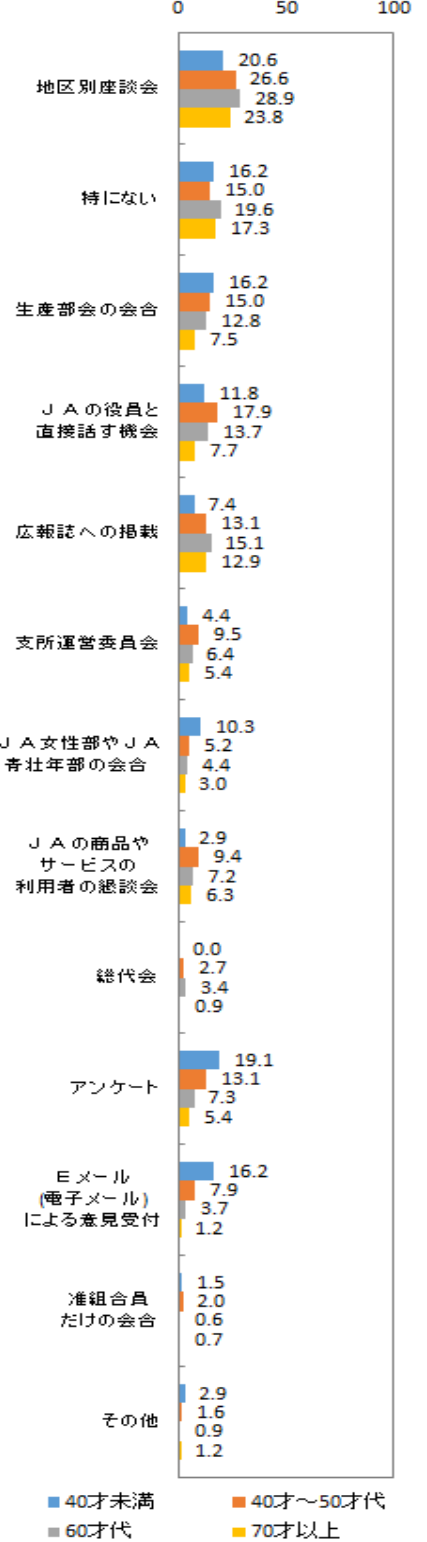
JAの事業・活動について学習する機会はあるか (%)



意見・要望を反映させるために増やすべき機会 (%)



意見・要望を反映させるために増やすべき機会 (%)



運営や事業に関して意見は反映されているか (%)

